



33年ぶりの『なんくり』にみる 私たちが見失い続けたもの

田中康夫が「33年後のなんとなく、クリスタル」（いまくり）を上梓する。題名のとおり、1980年に発表された彼の処女作「なんとなく、クリスタル」（もとくり）の、なんと33年あとの物語である。愛犬ロッタと

散歩中の偶然から、主人公の「僕」は昔のガールフレンド、由利と再会する。「もとくり」の最後で、「なんとなく気分がよいものを、買ったり、着たり、食べたりする」「あと十年たったら、私はどうなっているんだろう」そう独りごちていたあの由利と。

2人は、東京・青山の骨董通りの奥でバス料理を楽しむ、東京タワー下のバーでグラスを重ねる。「僕」の頭の中で、記憶の円盤が回転するたびに、かつての時々シーンや言葉がありありと再現され、「もとくり」に書かれなかったさまざまな背景や、なぜ「もとくり」の最後の註に、唐突に、日本の人口動態予測がおかれていたのかなどが明かされる。

今回も仕掛けに満ちた膨大な註がある（色彩にこだわった理由の謎解きは読書界の話題になるはず）。会話の駆け引きの巧

みさは田中康夫が天性の作家であることをあらためて思い出させてくれる。「僕」が体験したジェットコースターのような人生。その間、由利もまた、なんとなく、では全くない模索の旅を続けていた。読み進むうちに、実に本書は33年後の物語ではなく、33年間の物語であることに気づかされる。

「僕」と由利は、密やかに口づけを交わすまでに再接近する。その後、どうなるかは読んでのお楽しみだが、ここが村上春樹との鮮やかな違いではないだろうか。ペログリといった言葉から巷間流布しているような、軽薄で、無軌道で、不見識なイメージとはうらはらに、モラリスティックでオネスト、そしてデューセントであることこそが田中康夫の本質であることが本書を読むとよくわかる。

そこに、この33年間に私たちが自身が見失い続けたものが重なってくる。今、時は暮れようとしているのか、それとも明けようとしているのか。「もとくり」が時代の里程標として今も読み継がれているように、「いまくり」もまた絶えず読み返される小説となるだろう。